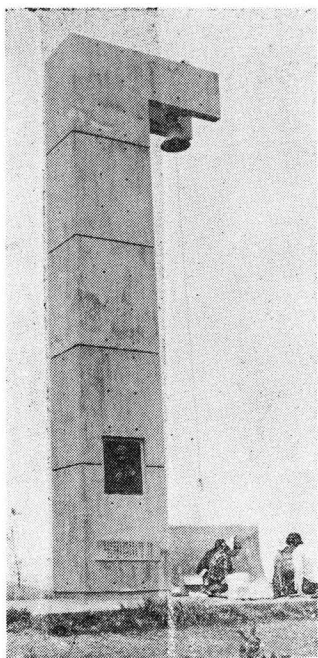




高千穂町(宮崎県)のウエストン碑について

七月号会報(三三七号)三頁に「もう一つのウエストン祭」という見出しで、熊本支部春季総会報告を掲載しましたが、その文のおわりに、碑文として「(前略)……英人ジョン・フランシス・ランドラン君及び神戸在留同国人ジョン・エドワード・ウエストン……(後略)」とありましたが、なぜ「ウォルター・ウエストン」が「ジョン・エドワード」と書かれているかなど、数点の疑点を熊本支部に照会いたしましたところ、同支部の西沢健一氏及び佐藤光俊氏(高千穂町観光係長)の両氏が熱心に調べられ、その結果を多数の資料とともに送ってくれました。その中にはウエストンが明治二十三年立寄った庄屋宅の日記のコピーも含まれております。

調査が非常に詳細を極めており、その全部をここに記録することができませんが、概略を抄録してここにおめにかけます。両氏に感謝します。



昭和48年(1973年)
8月号(No. 338)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文

- 高千穂町のウエストン碑について… 1
小泉信三さんの書簡…伊藤秀五郎… 2
ホッフゲビルグス登山学校のこと…池沼 慧… 2
アタックと遭難事故前後…信濃支部アンナブルナ登山隊… 4
会員通信
中央大学アビ登山隊より…市川邦治… 5
巻 機 山…川崎精雄… 5
ティンバーリン・ロッジにて…海野治良… 6
一枚の色紙…安川茂雄… 6
登山技術講習会に参加して…中原万次郎… 6
大町の山岳博物館…鈴木 実… 6
御蓋(みかさ)山…茶谷東海… 6

行事報告

- 第11回金山平・木暮理太郎翁
碑前懇談会…川北 仁… 7
第13回登山技術講習会…宮下秀樹… 7
図書紹介
GEOLOGY OF NEPAL
HIMARAYA ……木崎甲子郎… 8
ヒマラヤチョウと花の旅…春田俊郎… 8

会務報告

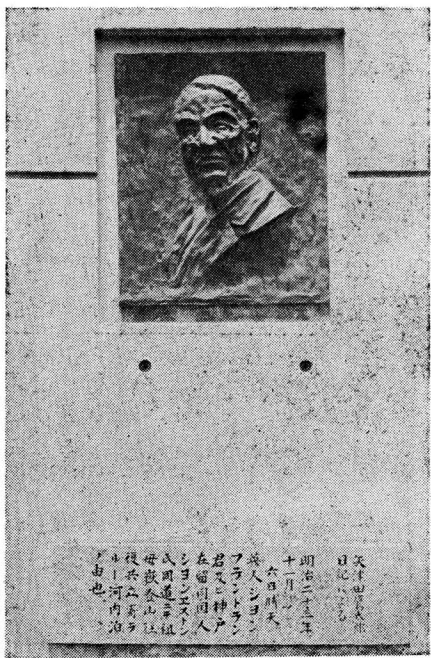
- 図書委員会報告… 8
会員異動… 9
ルーム日誌… 9
図書室便り… 9
復活・新入会員等… 10

矢津田鷹太郎日記

宮崎県の高千穂町(現在)五ヶ所所
庄屋をしていた矢津田鷹太郎(安政三
年十月一日生)という人があり、この
人が長年に亘り毎日日記を刻明につけ
ていた。明治時代であるから、和とじ
のノットに墨書で書かれており、今日
でも極めて鮮明であり、内容は百パー
セントの信頼度をもっている。この矢
津田の名が見出されたのである。明治
二十三年の日記の冒頭には「明治廿三
年日記 二千五百五十年 千八百九十
年」とあり、続いて「日向国高千穂
士族 矢津田鷹太郎 三十三年四月」
と自署がある。

ウエストンの記録

十一月六日 晴天とあり、本文に
「英人ジョン・フランシス・ランドラン君及神戸在
留同国人同道ニテ祖母岳登山往復共立
寄ラル―河内泊ノ由也」と書いてあ
るが、この文の「神戸在留同国人」の
よこに「エドワード」と加筆されてお
り、さらに欄外の頭註に「英人」とあ
って「ジョン」と「エドワード」の仮名
の名前が二行に並べて書いてある。恐
らくジョン・フランシス・ランドランは当時矢津田
翁と既に懇意であったので「ジョン」



と書き、ウエストンはこの日初めて来
た同行者で、ジョン・フランシス・ランドランに紹
介されたので発音に従って「エドワード」
と書かれたかと思われる。碑文ではこの
ジョンとエドワードを一人の名前と考
え「ジョン・エドワード」としたが、エ
ドワードの方はウォルター・ウエストン
の人であつたろう。(碑文のジョン・エ
ドワードのジョンは近く抹消することにな
ったとのこと)
ウエストンの行動と推測
明治二十三年といえ、ウエストン

の来日の初期であり、明治二十四年に
中部山岳に足を踏み入れる前、まだ
全く無名の青年牧師であった。ウエ
ストンを高千穂町に連れていったフラン
シス氏は、同町田原の景勝地が気
に、避暑のためたびたび高千穂町を
訪れ、明治二十三年には矢津田翁と面
識が深かったことは確かである。ウ
エストンが後年に著した「バンドブック
・フォア・ジャパン」の中に祖母山に
登ったことが書かれており、このほか
阿蘇山等にも登ったことが紹介されて
いる。けれども地元では何も記録がな
く、人々の記憶もなく、ウエストンの
名があるのはこの矢津田日記だけであ
る。また矢津田チエウゾウ(漢字不明)
という人が明治の中頃、外国人をたび
たび案内したという記録もあるそう
で、この外国人がウエストンである可
能性も高い。しかしランドラン氏や
ウエストン氏が祖母山に登山した頃
には、他にも外国人の登山者があつたこ
とも知られている。
ウエストンのレリーフ
地元でウエストンのレリーフをつく
るに当って、写真も何もなく、原画を
つくることは困難であった。そこで苦

肉の策として、昭和三十八年五月初版発行の角川文庫「日本アルプス」にのっている二枚の写真ミックスして原画を作成した。この二枚の写真は、一枚は松方三郎氏旧蔵の肖像画であり、他の一枚は上高地のウェストン像であり、それを調和させて作ったとのことである。製作は宮崎県在住の方である。

碑の礎石について
高千穂町がウェストン記念碑を建てるに当って、何かウェストン師にゆかりのある石を礎石としたいと考え、外交機関の助けを借りて交渉し、結局希望通り、ウェストン師旧邸の庭石一個

の寄贈を受けて、それを埋めこんで作成された。ウォルター・ウェストンは一八九七年から一九〇二年までの間、ウインブルドン市のコテンハム・パーク・ロードのブリン・コティンに住んでいて、クライスト・チャーチの牧師であった。そのブリン・コティンの旧邸の庭は現在でも、ウェストンの住んでいた当時の形を残しているようで、その庭石の一個が寄贈されたわけである。この間の交渉や事情は一九六四年二月十日付の英国地方新聞「ウインブルドン・ボロ・ニューズ」に詳細に書かれている。

小泉信三さんの書簡

伊藤秀五郎

古手紙を整理していたら、小泉信三さんの書簡が一通出てきた。昭和十三年十二月一日付の、鎌倉海浜ホテルの便箋のものである。取立てというほどの内容のものでもないし、山には関係がないが、日本山岳会には小泉さんの知友や後進も多いし、僕にとっては懐かしい人のひとりなので、書きとめておく気になった。

新聞への御連載の文並に十一月十日の御手紙有難拝見しました。はじめ、お名前を見た時は、フィラデルフィアで拝顔の伊藤さんとは気が付かず、一寸考へました。小生の秘書をしてゐる秋元君といふ人が登山家で、御名前を見て、これは山の方で知られた人だと申しました。小生は此頃は全く山に登らず、その方での御名も知りませんでした。

日本の学問は目下実業界と同じく景気偏在の嫌いがあります。人文諸学の方も発達はやや偏在してゐるやうです。小生の方の学校でも色々考へねばならぬ事あり、アメリカの大

の寄贈を受けて、それを埋めこんで作成された。ウォルター・ウェストンは一八九七年から一九〇二年までの間、ウインブルドン市のコテンハム・パーク・ロードのブリン・コティンに住んでいて、クライスト・チャーチの牧師であった。そのブリン・コティンの旧邸の庭は現在でも、ウェストンの住んでいた当時の形を残しているようで、その庭石の一個が寄贈されたわけである。この間の交渉や事情は一九六四年二月十日付の英国地方新聞「ウインブルドン・ボロ・ニューズ」に詳細に書かれている。

学の事など思い起してゐます。

鈴木限三さんは遠縁の人で、少年時代相撲を取ったことは、こっちでもよく覚えてゐるとお伝へ下さい。コレレー女史結婚の由、快報と存じます。一昨年フィラデルフィアに遊びしは十日の事で、パレーフォジに遊びたる日に見渡したる野と丘の景色、ドッグウッドの鮮紅の色など々々目にのこつてゐます。貴兄も時々彼地の事を憶起さるならんと拝察してゐます。

一日閑をぬすみて当地に遊び取急ぎ御返事のみ
十二月一日 小泉信三

この文面からも分るように、僕は小泉さんとは親交があったわけでは無い。アメリカの有名な細胞学者のマツクラング教授が、昭和八年から九年にかけて、ロックフェラー派遣教授として慶応大学で動物学を講義したことがある。その一年間、慶大の好意でマ教授について指導をうけたが、マ教授の御伴で、当時すでに学長だった小泉さ

んのパーティーに招かれたことが二、三回あった。コレレー女史というのは、ペンシルバニア大学の教授だったマ博士の秘書で、自身も細胞学をやっている。教授夫妻とともに来日、数年後厚生動物学者のデリア博士と結婚した人である。マ教授の停年後、女史は癌研究所に移り、一昨年定年で辞めるまでずっと癌の研究を続けていた。

マ教授の帰米後、僕は引続いてマ教授のところに遊学した。昭和十一年にハーバード大学創立三百年祭に出席したときアメリカ各地を廻った小泉さんは、フィラデルフィアのペン大学を訪問され、そのとき一寸お目に会った。このときの旅行記が「アメリカ紀行」という本になって刊行されたが、その中に僕の名前が出てくるので、十三年北大に帰った僕は、マ教授夫妻やコレレー女史の消息と、自分の近況を伝えたい手紙を差上げたのである。

鈴木限三先生は北大予科の植物学の教授で、長年北大山岳部の部長をしていただいた恩師であるが、小泉信三さんとその従兄弟の阿部章蔵（水上瀧太郎）さんともだいたい同じ年頃で、少年時代三人でよく相撲をとって遊んだことなど、鈴木先生からおききしていた。その阿部さんとも、大正九年の夏台湾旅行の際、紅頭嶺から台東を経て花蓮港までの船で一語になったことがある。そのときのことは、水上瀧太郎全集の「日記」に出てゐる。僕は読んでいないが、いつか水上瀧太郎全集を読んだ友人が知らせてくれた。台湾から帰って間もなく、水上さんから一通の手紙が届いた。明治生命の役員だった阿部さんを案内して台湾を一周した台北支店長が、台北に帰るとマリアで急逝したそうで、マリアが発生地域を採集旅行していた僕の安否を気遣つてくれたのである。鈴木先生や、水上瀧太郎が編集者だった三田文

学にととき作品を書いていた早川己代治さん（北大出身の経済学者）などを僕がよく知っていたのが話のきっかけで、船中で一晩語り明かしたときの阿部さんの人柄に僕は大人好意をもつたが、いわば行きずりの一青年に対する行届いた配慮に僕は改めて敬意を表した。

僕は小泉さんの著書の愛読者でもあったが、僕の知る限り、現代の日本人で偉丈夫という感を受けた人は、小泉さんと内村鑑三さんの二人だった。

ホッフゲベルグス登山学校のこと

——一九六八年の思い出——

池沼慧

五月も終りに近づき、うっとうしい梅雨時を迎えようとしている日本を離れ、私達一行、といつても瀬戸在住の石川清流と、山には全くの素人の姉との三人連れは、シベリア鉄道に乗込んでいた。車外は抜けるような青い空、果しなく続く白樺の林。美しい自然に恵まれたロシア。北国の春にこればればかりに降りそそぐ陽光の中を、アルプスへの憧れは日増にふくらんでいった。この五月晴れのロシアの旅を一周間で終り、六月三日スイスのグリンデルワルト入山。

アルビグレンの小屋に宿泊。グリンデルワルトでは天気が悪く、一日中天気の良い時はほとんど無く、山行のほうも思わしくなかった。アイガー西壁を登り、続いてメンヒの登頂と氷河のトレーニング程度で、一月近い日々をおくってしまった。

六月三十日ホッフゲベルグス登山学校（HOCH GEBIRGS SCHULE）入学。学校はオーストリアのツェルムゼー（ZELL AM SEE）にあり、鉄道の駅からバスに乗り換え、終点に

マ教授とコレレー女史のことが出たついでに書き添えると、この二人には藤島敏男さんもフィラデルフィアに寄ったとき会った筈である。春先のまだ寒い季節だったが、臨海実験所で名高いウッツホルを訪ねるというので、コレレー女史にそここの図書館長に紹介状を書いて貰ったことがあった。彼女は昨年夫妻でヨーロッパ旅行をしたそうだが、今年は三十五年振りに日本を訪れたいという話である。（四八・六・六）

着くと、売店にいた人なつこそうなマダムらしき婦人が私達を見付けたり側に寄つて来て、さかんに話しかけてくるのだが、なにを話しているのかさっぱりわからず、しつこいおばさん一人に私達三人の方が、うろたえるくらいだった。私達が日本人でありモラベックの登山学校に來た事がわかるから、オリンピックのせいだろうか、トリーキョー、トリーキョーなどといふきながら、ほおにキスするなり、売店の中からワインを持出して来て、私達にふるまってくれた。別れる時には、いつ覚えたのか「サヨナラ」と何度も繰返していた。私は愉快なマダムのテンポとワインのほろ酔いな中で登山学校に着。早速校長のモラベック氏に会い、私が日本山岳会東海支部員であり、アコンカグア遠征隊の紹介によりここに來た事等を話すと、一人一人と丁寧に握手を交し、大変喜んでくれた。学校からほんの少し離れた場所に校長が自分で経営している、一般用のホテルに招き、フロントに飾ってある写真を示し乍ら、アコンカグア南壁での東海

支部との出会等を語り、概の学校内容を説明し、私達の入学手続を済すと、宿舎に案内してくれた。この時も一人望月という名の日本人が二三日前頃からこの学校に来ていた事を知った。宿舎の建物は四棟ばかりで、主に二人〜四人用の個室で八十人位は収容出来る様になっていた。木造ではあるが、日本の山小屋よりはるかに優れている。校内での登攀用具は全て貸出で出来る様になっていた。例えば、ビッケル、アイスパイル、アイスメス、ハーケン、ツェルト、ザイル、ヘルメット、アイゼン、カラビナ、ゼルプストザイルその他無料で借りることができ、登山用具に心掛けの無い初心者であっても、個人装備だけで校内に於ける登山は全てできる様なシステムを設けている。クラスは三コースに分れていて、初級、中級それとマスタートークラスとなっている。マスタートークラスを卒業するとモラベックの学校で助手としてのアルバイトも出来るようである。私と石川は始めからマスタートークラスには入学することが出来る。中級に、姉は初級に入った。費用はクラスに依り、初級で一週間分約二四、〇〇〇円、中級で約三〇、〇〇〇円、マスタートークラスは一週間分約四〇、〇〇〇円ぐらいであった。当時の日本円に換算しているのだから正味ではないが、三食付であるからへたなホテルに泊るよりも安いからである。

入学した日の夕方、例の望月氏に会う。彼は東京の駒沢大の山岳部員で、彼の先輩の紹介で、この登山学校へ来たと言っていた。

その夜、食堂に全員集まって校長の訓示があり、学校開きを兼ねた生徒全員の入学式が行われた。テーブルの上には各国の生徒の国旗が並べられた。日本、オランダ、ドイツ、オーストリア、フランス、チェコスロバキア、ス

イス、イタリアと色とりどりの旗にロケットを灯し山歌などを合唱し、言葉はおたがい通じなくともビールをくみな入学式である。翌朝快晴のグロスグロックナーの山脈をクラス別なく(歓迎登山兼足なら



でも日本人はみんな食べる。三日目。今日からクラス別の登山が行われた。中級は三つの班に分けられ、私の班は、石川、望月といった日本人グループであった。中級及びマスタートークラスは二人〜四人に一人の教師がつくが、初級は七〜八人で一人ついている。今日の目標はグレンスコゲルアイスパンドでこのあたりでは最も傾斜の強い氷壁である。壁は六十度〜七十度で約一五〇メートルは続いている。ザイルのトップは教師と望月と入替りで登る。グレイドは、四級の上位だと言っていたが、日本の同等のグレイドと比較するとかなり難しい。登攀用具の着装は、左手にアイスメス、右にはアイスパイル、足には、前に突出したアイゼンを使用。四点は全て鉄の力を借りなければならず、これを互に突刺して登るので非常に疲れる。スクリーパーの垂直線より十〜二十度上傾きにねじ込みながらセットしてゆく。水の登攀は岩場より短期間に肉体的労力を費す

しであろうか。六時間位の山歩きと雪上訓練を行う。行動食は朝食支給されるのだが、チーズ、黒パン、バター、ジャム、サラミソーセージ、紅茶、生の人参または茄子、りんご等といったところだが、生人参と茄子はあまり生徒に受けない。

このようにして、実際の登攀と基礎訓練を組合せたスケジュールを終了し、合格すれば中級の認定証とバッジが与えられる。中級の認定証を貰うとマスタートークラスに進むことができる。私達は非常に強くマスタートークラスに入ることを希望したが、中級にいた時もかなり多くの時間別行動を取らせてくれ、優先的に氷壁の登攀等を訓練してくれた様子である。他の中級

が、快適にビッチを上げる事が多いと思われる。四日目。氷河にて歩行訓練。この氷河は学校から一時間位で行ける距離にあり、ここでの訓練は広範囲に行われており、其雪に依りクレパスの中に下降、横断、トラバース・ジャンプ・フリクション、水のチームリーダー・バールン・登攀等、クレパス発見法、渡りかた、クレパスからの脱出方法、氷におけるこのまかいテクニクや、あらゆる救助法などを実地訓練し、激しい登攀を終えた翌日は近くの氷河や、岩場でトレーニングするスケジュールになっている。

五日目。ベアムコップの北壁、海拔三千m、平均傾斜度五五度、取付点より高さ二〇〇mの氷壁、登攀時間約四時間にわたる実技訓練が行われた。六日目は、氷河でやや高度なテクニクのトレーニング。七日目はクレタターガーデンで救助練習。此のクレタターガーデンは、宿舎の裏山のダイナマイトで爆破し岩場にしたもので、高さは十五〜十六mで幅は三十m。天候の悪い時は、この岩場でトレーニングするらしく、グレイドも付けられている。ぜんぜん登れそうもない所もあるのに、六級が無く五級までしかない。きいてみると今までは、落ちたことはあっても死んだ人がいないからだそうだ。

このようにして、実際の登攀と基礎訓練を組合せたスケジュールを終了し、合格すれば中級の認定証とバッジが与えられる。中級の認定証を貰うとマスタートークラスに進むことができる。私達は非常に強くマスタートークラスに入ることを希望したが、中級にいた時もかなり多くの時間別行動を取らせてくれ、優先的に氷壁の登攀等を訓練してくれた様子である。他の中級

の生徒達に較べ、より一層個人指導に近い教え方であった。天候の良かったためもあった。他の普通の生徒達よりは或程度期間は短縮されたいたかもしれない。そのためかマスタートークラスが開始されると直ちにこの学校の最高目標であり、卒業検定とみなされるビスパールン北西壁(Wiesbach horn Northwest wall)の登攀に出発することになった。新しく編成されたクラスでは望月氏と私と、フランス人のミッシェルという十八歳の男が一つの班のメンバーであった。今シーズン初のマスタートークラスで、彼は気を良くしていたのか、片語の英語で私達によく話したり、明日の登攀用具を一緒に昼食をとり、明日の登攀用具を点検した後、教師一人を加えた四人一組のパーティーで出発し、この日の夕方北西壁と学校の中間にある小屋に到着し、そこでビバークした。ビバークといっても山小屋であるのだから快適ではあるが、睡眠時間が短かった。四時間半位の睡眠しかとれなかった。翌朝早朝午前二時起床午前三時小屋出発。氷壁の登攀は朝早く主だった行動は全て午前中に終るよう計画される。これは日中に終ると温度が上がり、雪崩れの危険性が往々にしてあるからだ。取付点六時登攀開始。バイル、アイスメス、アイゼン、鉄に依る四点の動作は単調だが疲労度は激しく決して気を許す事が出来ない。何故なら、氷壁では二人落下すればおそろしく助かる見込が無いからである。ビスパールン北西壁は平均傾斜度五五度〜六〇度、高度差四〇〇m、海拔三千七〇m、登攀終了六時。頂上十二時、正午に登攀終了。最終目標とされているこの登攀を早々と終えてしまったので、残りの三日間は氷河やクレタターガーデンに於いてのトレーニングが日課になってしまった。

(以下次号へ)

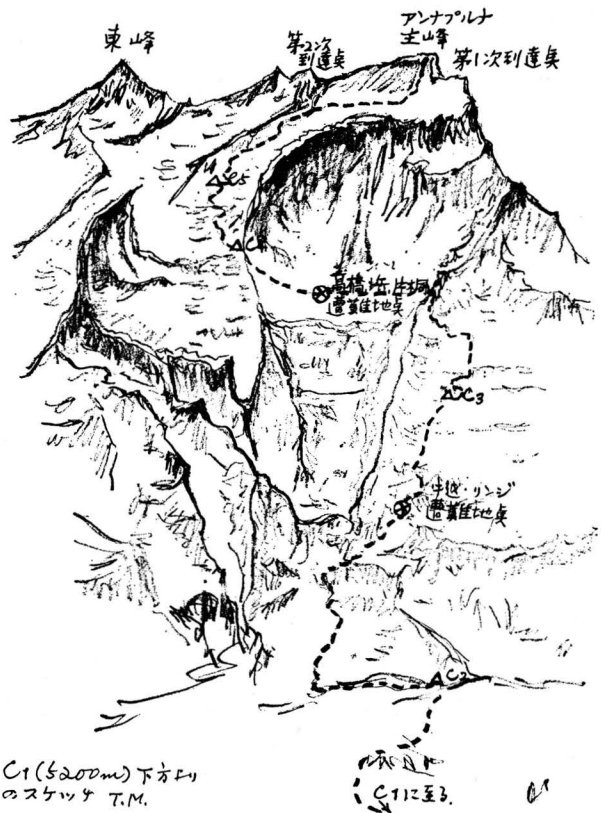
アタックと遭難事故の前後

信濃支部アンナプルナ登山隊

目標にしていた北東パットレスが、なだれと数多いクレバス、不安定なセラックの連続で登攀不可能と断定されたのは、四月二十日であった。このルートの放棄を決定するのに、およそ一週間の試登が繰り返されていたわけである。

翌二十一日から、一九五〇年のフランス隊のルートに沿って頂上を狙う工作が始まった。

六〇〇〇mのC2から、なだれの危険を極力避け、時間を取らず、また、荷上げの可能性の十分あるルートを選択するという目安を立てたのであるが、選択するまでもなく、実際に氷河



内部に入れば、図のようなルートしかないことが解ったし、また、地形からみてもなだれの危険のない箇所などは、ほとんどないといってもよいくらいであった。

四月二十六日、C3を建設した。中間台地から鎌氷河の下部に取付

き、ただちに、氷壁に沿って斜登し、凹状の緩傾斜部へ出る。ちょうど、腕の一方を欠いて下側へ傾けたような感じ、周囲は氷壁。上部からのなだれに洗われ、氷壁が露出している。

この腕のふちの最右端を上り、深いクレバスを渡り、数mの壁をのし上がれば、後はほぼ真直にC3への単調で

苦しい登りが続く。C3は六八〇〇m、両側に急斜面を持ったセラックのかげに、ちょうど、鳥の巣のように二張りのテントが設置された。

この辺りになって、隊員とシエルバの高所に対応する能力が平均化してくる。経験がない限り、これまで牛みたに強かった奴が簡単に頭痛で参って、彼らの順応力も絶対的なものじゃないんだと、改めて安心する。高度馴化の方法に細心の注意を払って、オペレーションを組むに急がしい。

C3の背後の水塔を廻り込んで、比較的緩い斜面から小さな雪壁にぶつかるが、ここにも、ワイヤー梯子がかけられた。鎌氷河の入口は、複雑な岩稜のトラバースである。広大な船底形の鎌氷河は、下で眺め想像していた程には易しくない。傾斜感もあり、第一広い。われわれが

「象足」と呼んだ顕著な三つの氷塔の下を、ほぼ水平にトラバースして右岸のふちの岩稜に出れば、七一〇〇m。五月六日、C4の建設。

高所で行動可能なシエルバが少なくなってきた。C4から深い雪の斜面を登って上部氷河に入る。平坦で緩やかにみえていた上部氷河も、やはり相当な傾斜がある。

五月十三日、三日間のルートワークと荷上げで、C5七五〇〇mができた。強風となだれの危険を避けて、クレバスの内部に張られた天幕に、第一次アタックの牛越・パサンルプが入った。十四日、B・Cからの通信によれば、ミルステイコーラから雲が流れこんで来ている。現在快晴。ただし、上部氷河から山頂は風が強いらしく、雪煙が上っている。

C5の二人は七時四十分に出発した。十一時五十分、アタック隊は頂上から約二〇〇mの岩壁部に位置し、ここから東峰頂上は真横に見える。調子もわるくない。

十四時少し過ぎ、B・Cの堀内隊員より、アタック隊の二名が、頂上直下のガリーを登攀中の姿を望見できた。このこと。山頂付近は、モディイコーラからの霧が常に通過し、なお、その逆流現象で、まさに影絵のような山容が散見するのみ。全員がトランシーバーからの声を緊張して待った。

十四時四十分、牛越隊員より二回目の連絡。頂上直下一〇〇m、これは高さではなく、距離だという。力を振ってがんばるようという。なお、種々の判断から、C5に待機している降旗・チョンリンジに対して、彼らの帰途を出席するよう指示する。

十五時二十七分。「もう、これ以上、今日は登れません。牛越隊員の声は不明瞭な、いわゆる、ろれつ、のまわらぬ状態であった。強い

風の音と、彼の激しい息遣いが聞こえる。「ようし、すぐ下りろ。時間は十分あるぞ、あわてな。」

残念ながら、第一回のアタックは不成功に終わった。頂上まで、距離にしてわずか五〇m。同行のパサンルプが後で語ったのに、「頂上はほんの目の先にあった。私が先にやって、ザイルで曳き上げようといったのに対して、彼はそれをがえんじなかった。本当に、頂上はザイルの一ビッチ分しかなかった」という。部分的に、予想外に深い雪のラッセルが、体力の消耗を早めたと思われる。

十五日、第二次のアタック隊、降旗・チョンリンジは、途中でルートを誤り、主峰・中央峰の鞍部約八〇〇〇mに出たが、午前中の快晴が午後は急速に悪化して風雪。十三時三十五分、C2付近も降雪。雷が発生してトランシーバーに滞電する。天候好転の可能性なく、危険を避ける為下山を決定し、彼らは下降にうつった。

十四時五十分、C4とC2交信中のトランシーバーに降旗の声が突然飛び込む。下降中、バートナーのチョンリンジが突然倒れて吐き、現在酸素を吸入させている。過去の高山病の症例からみて危険率は非常に高いと思われるが、C5へ収容し、考えられる限りの手当てをするよう指示する。

五月十六日、降旗・チョンリンジはC5からC4へくだり、なお、サポーターにゆだねられた病人の症状は予断を許さぬが、全力を挙げて治療に当る。C4のメンパー、塚原、片桐、高橋とパサンルプ、本日、浜が加わる。夜半より雪。

五月十七日、C4付近の積雪三〇センチ程度の由。C3は上部からの小さなだれで再度テントを埋められ、全装備をつけたまま病人の看護をしていると

いう。位置からいっても、大量の降雪時はなだれの危険率が高い。無事を祈る。

現在の降雪では、上部キャンプの行動は不可能であり、必然的に登頂の可能性は著しく後退したと思われる。食料・体力・シエルバの意欲・天候の諸条件を考慮して登頂計画の中止を決定し、全員が了承した。

五月十八日
朝六時、C3より連絡。テントが雪の為に完全に埋没し、比較的大きななだれがあればつぶされる危険度が高い。チョンリンジの病気の点も考慮して、何とか早急にC2の安全地帯へおきたい。

行動してなだれにやられる危険も当然あるけれども、C3のキャンプで全員がやらせてしまふよりはむしろ、C3の隊員・シエルバ全員の意見であるという概要であった。

C4の浜隊員より連絡。C3が微収した場合、C4が孤立してしまうのではないかと、C4に対して、浅輪登攀隊長は「装備・食料も十分にある故、三・四日の滞在も十分できるし、また、C3とちがってC4は安全なはずである。天候回復を待て、現在の悪天はモンズーンではない。回復次第こちらからも迎えに出る」という回答をした。

しかし、C4の四人で話しあった結果、しかし安全ではないという意見が圧倒して、彼等も下降の意志を強く訴えてきた。

十時三十分、C4の全員が下降を開始した。オーダーは、高橋、浜、片桐、塚原、バサンノルブの由。

十時四十五分、C3より下降開始の連絡。胸迄埋まるという報に、改めて危険箇所について助言する。

十一時十五分、上部の浜隊員より連絡。フィックスドロップが切断してお

り、高橋隊員が接續作業をし、全員が行動を停止している。現在、左側の象足の上部、風が強く視界がないとのことであった。浅輪は、C4へ全員引返させと指示するが、浜「皆と相談してみます」と答える。交通絶える。十二時半頃より雷鳴、トランシーバー感電して役立たず。

緊迫した時間。まるで時間が停止したかのようだ。
十四時四十分、C3より下降中の降旗より通信あり「新雪表層になだれにより、北水河中央部緩傾斜地点で、行動中の牛越隊員ならびにリンジの二名が流されて行方不明。下部は氷壁で捜索は全く不可能。風強く、視界ほとんどなし。こちらより、他の隊員、シエルバ全員、ただちに安全地帯におりるよう指示。既に、下部の雪原地帯も安全ではない。」

十五時四十分、シエルバ二名を雪原地帯のラッセルに出す。
十六時四十分、降旗帰着。浜隊員使用の、アイゼン・オーバーシューズを着けたままの登山靴片方を、鎌水河下で拾得した件を聞き、暗然たる思いで雪の中に立ちつくす。十七時、新谷、シエルバら帰着。疲労の色濃し。

浅輪・松水・シエルバ三名、せめてもの捜索に出る。深く、腰までもぐる雪の中で闇を迎える。夜、雪降る。
五月十九日、C4に二名生存者あることを発見。トランシーバーでの通信はできず、七時四十分、彼らは下降を開始した。鎌水河のトラバースに腰までのラッセルをしているのがみえる。捜索。霧と小雪。全員疲労でくたくたになる。

十八時三十五分、C4からの二名、塚原・バサンノルブがC2に帰着。サードのソナヒシが、泣きながらバサンを抱きしめる。
五月二十日、青空が時折のぞくも小

雪。事故発生時からの降雪と、夜間のなだれによるデブリで、遭難者発見の可能性はなからうと判断。捜索を中止して、全員B・Cに下降することに決定した。
深い雪をわけてC1へくだる。頂上は霧でみえない。(文責 松水)

中央大学アビ登山隊より

会 員 通 信

隊長 塚本 茂樹

四月一日にアビ南面、南水河上にベイスキャンプを設営して以来五月十三日までの約五十日間を、アビ西稜から登頂を試みておりましたが、予想以上のナイフリッジと、多くの標高差のある岩壁と雪壁にはばまれ、六千mのC4より約八百〜九百m稜線上の最低ホル(五七〇〇m)までの我々の全員Bを終了いたしました。五月十三日全員Bに下山いたしました。北面と違いやはり南面はかなり困難なルートですが、クローアルといい、また西稜とい

巻 機 山

(BCにて 市川邦治)

い、実に我々としては一つ一つのセクションで多くの登山技術を使わなくてはならないことは、非常に楽しい登山をやっていたようです。もう少しの時間があれば、アビ西面の壁はかなりの所で登攀は可能であると思います。いろいろと御世話になり誠にありがとうございます。詳細は帰国してから御報告申し上げますが、全員無事下山できましたこと、かんたんではありませんが御報告申し上げます。

今年の五月三十八年ぶりで、巻機山へ登った。望月達夫山田哲郎両君は土曜朝の列車で先発、私は夕方五時近く上野を発った。三時間で六日町着、心配したタクシーは舗装された道を、清水へ向って疾走する。こんな短時間で東京から清水入りが出来る時世なのに、私の脳裡には石ころ道が昨日のように思い出される。

清水バス停ぎわの民宿に、先発両君は一ぱいきげんで待っていた。隣の民宿の電灯看板に「おのづか」とあった。私や友人が泊まった小野塚豊重(故人)の家である。

翌朝も天気は洪々の雨もよいで、やがて悪化するのには明らかだが、朝食を頼んだので、早立ち出来なかつた。山側に大杉の木立を雪除けにもつ、葦屋根の民家がある。地にどっかり腰をおろしたようなその姿は、古来のものであり美しい。

広い登り道に驚きながら行くと、モーターブールの場所があつて、巻機山がその方面での丹沢や三ツ峠の賑わいをもつことを知った。沢をゆく登路を避けて、尾根伝いの道を登った。山菜とりの婆さんたちと会う。コブシが咲いている。登川の向うに大源太山が雪を装い、岩の尖峰を曇った空に立てて

いる。その先遠く七ツ小屋山や谷川連峰が、ガスにばやけて見える。清水峠のくびれが顕著に指呼される。この峠も舗装道路が越すようになろう。

石楠花の咲くあたりから残雪を踏む。ニセ巻機の頂上からは雪も豊富で、巻機本峰のゆったりした山容が前面にひろがっている。懐しい春の姿だ。その頂上に達した時、天気はついにまたなくなり、雨とも霰ともつかぬ洗れを受けはじめた。日曜だから登山者が多く、女性の姿も見える。

食事もそこそこ牛ヶ岳へ向う。米子頭の方へ明瞭な道が分かれて、縦走路と記した道標もある。十五、六年前だが、当時この辺に熱を入れていた或る会の人に、尾根に道があるか否かたずねたことがある。道の形はありますとのことだった。私の知識はこの程度だが、今や全く立派な尾根伝いの道である。

あいにくの天候で、まだ真白な笹の利根源流一帯が眺められず残念だった。私がスキーを使ってそこに入つたのは昭和十年頃の四月だった。小沢岳へ登る途中の尾根で、もう落ちないと思われる雪庇の割れ目にビバークしたのだが、今日はその地点も見えない。奈良沢から米子頭に達し、この巻機頂上に来たのは夕方の四時で、休んでいると南西の方面にドカンと爆発音が生じ、浅間の煙が天に沖するのが見えた。それを見てから、夕灯のちたつて清水部落へ向って一気にスキーを飛ばしたのだ。

牛ヶ岳の頂上では、雨は横なぐりの様相を呈してきたので、慌てて引返しになった。麓に戻るまでに全身びしょ濡れになった。とてもかかしく、列車は鈍行の炉傍で衣類をかかしく、列車は鈍行を選んで、足をのびしよく眠って帰京した。(川崎精雄)

ティンバーリン・ロッヂにて

前略、チャンスを得てスキーに來ました。調子が良ければアイゼン、ザイルで山へ登りたいと考えていました。冬のように四、五日降雪があり、スキーには好適でしたが、登るには不向きなのでやめました。絵葉書は十日間ほど泊ったロッヂから眺めたマウント・フッドです。真夏の写真ですが、正面中央のリッジにとつて右側の雪壁が右へ右へと廻りこみ上部のカール状雪田から頂上稜線へ出るようです。

普通午前三時頃ロッヂを出て五、六時間ぐらゐのようです。雪や氷の締っている間に登降するようです。南斜面ですから風さへなければのんびりとした山歩きができる筈でしたが少々残念な気がしています。

この反対側(北側)にも立派なエリオット水河があり、小島島水氏も滞米中に訪ねられたようです。その付近から山頂稜線にかけてよい岩壁がありクライミングが楽しめるそうです。南側は斜面がゆるくスキーにもよし、よい山といえます。

(織内宛 海野治良)

一枚の色紙

先日、書斎の小さなタンスを整理していたら一枚の色紙がでてきた。すっかり忘れていたのだが、色紙の右手に「中村清太郎君をしのぶ会」とある。

たしか中村翁の亡くなったのは私の日記によると、昭和四十二年十二月二十日の夜のこと、七十九歳であった。この会は、その一週間あとぐらゐに中村邸で催されたもので、たしか遺作展の相談みたいなことであつたと記憶している。色紙には、右から田部重治、石井鶴三、上田哲賢、神谷恭、足立源一郎といったJACの大先輩の名前がならび私も小さな字で署名してい

る。

色紙の左上端には石井画伯の一頭の猿の絵が描かれており、たいへん愉しい一穴であつたのを覚えてゐる。

それにしてもこの夜の出席者六名のうち、考えてみると四名がこの一、二年のうちに鬼籍に入つてゐるのだ。上田さん、田部翁、石井、足立の両画伯なのである。若輩の私は別としてお元氣なのは神谷さん一人になつてしまつた。

五年余りの歳月の流れであるのだが、みんなJACの元氣な長老先輩たちであつただけにこの一枚の色紙を私はしばしば感慨ぶくみつつづけていたものである。(安川茂雄)

登山技術講習会に参加して

アルプス行のトレーニングにと長沢氏と相談、富士の講習会に申込みことにした。七十四歳の小生が受付けてもらえるかどうかいささか懸念されたが松田雄一氏の骨折で若い皆さんと一緒に出掛けることが出来たのは幸であつた。

御庭の小屋に着いて宮下チーフリーダーから訓練の班(A-E)の編成が発表された。一つの班の人数は三、四人であるがA班だけはベテラン古畑コリーチの下に長沢氏と小生の年寄二人きりというリーダーの特別の配慮がありコーチの訓練にも手心が加えられたことはありがたかつたが、いささか淋しくなかつた。

第二日目の頂上への登山の際小生がお鉢へ到着したとき即座にビニールシートをかぶせられ何事かと思つてゐるうちに酸素ボンベが運ばれてゐた。その時自分では何の異状も感じてゐず、昨年ヒマラヤトレッキングでも全く高山病の症状がなかつたので少々とまどつたが御好意に甘えることとした。頂上付近で強風にあはられて少々フラフラし

顔色が悪かつたとのことだったが、おかげで直ぐ回復した。重いボンベを運びあげて下さつた御配慮に厚く御礼を申上げたい。

その夜、食後一同円座をつくつてピールの栓を抜き飲んだ。宮下チーフリーダー始め経験豊かなコーチ諸君の山の話には極めて興味深いものがあつた。話の後は歌に移り夜の更けるのも忘れ寝についたのは十一時を過ぎていたと思ふ。山で結ばれた仲間、若人も年寄も年令を超えて一つにとけこめるムードは得難いものである。

三日間の訓練はまたたく間に過ぎたが欲をいえばお鉢の中で一夜テントで過ごしたいと思つた。それにつけてもチーフリーダー始めコーチの方々の御配慮と御苦労とに対し厚く御礼を申上げた。またA班は炊事、後片付、掃除などを免除され他班に御迷惑をお掛けしたことをお詫びしたい。

この講習会に参加して感じたことは日本山岳会の中堅として活動しておられる方々の奉仕の精神と活動。これなくしてJACは存立しないであらう。小生は永年メンバーにただ名を連ねるだけで申訳ないと感じた次第である。(中原万次郎)

中原万次郎氏は七月十四日羽田発、モンブラン登山のため、シャモニーに向われました。(編者)

大町の山岳博物館

快晴のウェストン祭は大変な盛況で特に若い方々の多いのに驚きました。山を歩いて三十年昔の話をすると若い方々は嫌うがアルプスと云へば大学の山岳部員でもなければ若い者は少なかった。

処が近頃の山は若者の天国で三十代ともなると極く少なくなりまして吾々位ともなると本場に少ない。

会員の皆さんの中にも相当数の若者が居る様です。

山へ来る若者の目的は人それぞれに違つてゐるがウェストンの来日以前に既に日本の山岳地帯に生活していた吾々の祖先の有る事を知る人も少ないと思ひます。

これ等の人々がこの山深い所でどのような生活がどの様にしているか又自然と戦ひながら生活の知恵で考え出した日用品登山用品等を沢山興味深く展示されてゐます。

その他アルプスの地質、植物、動物等、標本、図解写真等で自然科学の全般を面白く且解り易く展示されてゐます。近代登山用具も昔のものと比較しながら展示されて有るのは大変に興味あるものと存じます。

吾々の会からもマナスル登頂に使用した記念の品々が沢山出品展示して有ります。

場所は大町の郊外の高台で白馬を始め五竜、鹿島槍、赤沢、蓮華から常念、蝶に至る迄で立山連峰を一望に出来る大変に展望の良い所に建つてゐます。

是非一度見学される様にお勧めします。国鉄信濃大町駅より歩いて二十分程の所で入場料は昨年迄は三十円でしたが、今年は多少の変更になつてゐると思ひます。(鈴木実)

御蓋(みかさ)山

戦艦三笠(横須賀にある記念艦三笠)の名は奈良の三笠山から命名されたものである。(海軍艦船名考参照)然しその三笠山はどの山であるか適確に知つてゐる人は案外少いのではないかと三層の若草山がいかに三つの笠を重ねたよう、俗にこれを三笠山と言われているが、本当は若草山の南東に隣接する御蓋山がそれである。(このことは奈良県観光課長の確答を得た)御

蓋山の名は蓋(笠)を伏せたような山形からきたらしいが、山全体が原始林のため、その感じは出ない。高さは二八二m、人目につかぬ山で、その北接する花山(四九一m)を御蓋山と感違ひする人もある。

去る五月の一日、御蓋山に登つてみた。春日奥山ドライブウエーの料金徴収所(大杉)で車を捨てて、車道を北へ歩くこと五分、右へカーブする車道と別れ、真直に幅二mの林道に入る。歩き易い道を十分位進むと小さな峠に出る。左へ分れた細道をとる。雑木の中を分けて十五分も歩くと苦もなく頂上に出る案内図にある七本杉らしいものは見当らぬ。本宮神社と言う小さいお宮に参拝して北西への道を下る。昔は参拝者が多かつたと見えて石段らしいものの跡が沢山残つてゐる。下ること十分でドライブウエーに出会つたが、それに出ないで御蓋山の裾を左へ巻くと春日神社の社殿に突き当たる。一時間のよい散歩道が終る。

因みに一般に三笠山と言う名は山容から取つたためか私の知るだけでも北海道から九州まで五十位ある。最高は御岳に接する二、二五六mのものである(山日記五八頁)。(茶谷東海)

第十一回木暮理太郎翁
碑前懇親会参加者

(順不同)

鶴岡元之助、河野幾雄、河西照江、石川忠、三井文恵、三井茂子、内海文夫、内海かよ子、松本龍次郎、山岸靖彦、小野むつ子、山村正光、横山厚夫、横山康子、山崎金次郎、川北仁、高遠宏、野口末延、川野男、近藤信行、近藤緑、山本稔、平和和雄、名見耶達男、織内信彦、島田異、長谷川満良、遠藤靖彦、田村英也、窪川五郎、神奈川基吉、千坂雅子。計32名。

第十二回 金山平、木暮理太郎翁

碑前懇親会に参加して

名古屋 北 仁

五月十九、二十日の金山平は五月晴れのさわやかな天候であった。山梨支部主催のこの会も、今年は先生の生誕百年記念として盛大に挙行された。

十九日、午後四時碑前に集合。山村山梨支部委員長が、碑前祭と、十月の本暮祭の区別について、五月はJACの集りであり、秋のは、増富観光協会、山梨岳連などの共催の公的行事であると、それぞれの性格を明らかにしながら、歓迎の辞を述べた。

織内副会長は、丁度木暮先生が会長であった、昭和十五年に入会したが、年少会員だったので、遠くの方から恐る恐るお顔を拝見していた。しかし、先生のいわれた、「生涯を通じて山登りを中断してはいけない」この言葉を銘言として山登りをしている、と挨拶をされた。

続いて、霧の旅会の創立者である山崎金次郎氏が、木暮先生がなくなられた時、新潟県の十日町に行っていた。先生は「趣味の会というものは、なかなかつぶれるものじゃない」といわれた。そんなわけで、霧の旅会、JACを通じて先生からの恩恵をこうむり、感謝しながら四季の山登りを楽しんでおる、と話された。

昨年、山崎氏と共に永年会員になられた、野口末延氏は、山に登り始めた頃から、先生のお宅にお訪ねして御指導を受けた。霧の旅会の会員である尾崎喜八君の最初に出した詩集「山の思ひ」の中に「木暮先生」と題する詩があるが、これ、これを朗読された。その最後は次のように結んであった。

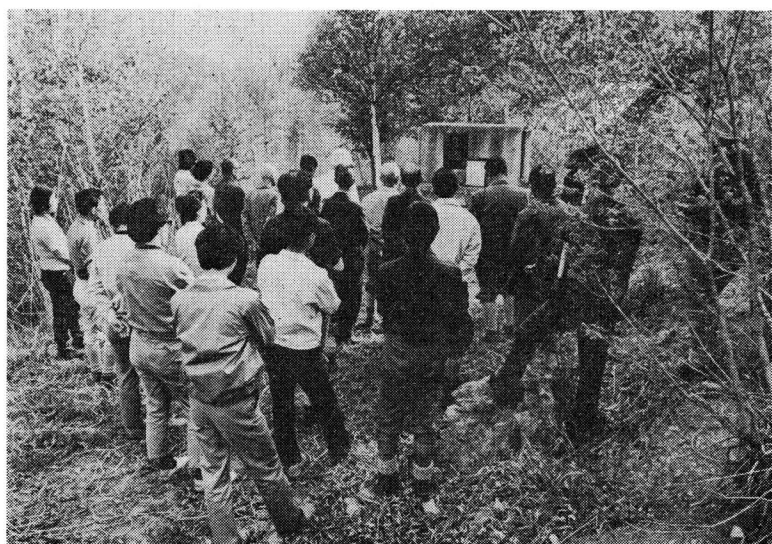
「ああ 先生！」

先生は 本当の人間の生きた証拠 生きる日々 たまたま迷ってつま ずくとき

私は 貴方の存在をもって 立ち ならぬのです」

次、この碑を建て、護ることに力をそそいでいた、三井松男前山梨支部長の末亡人、文恵さんが、今年には仲間に入れてもらえないのが残念だ。しかし皆様にこの会に来ていただくことがそが主人の願いではなかったらうかと挨拶された。

そのあと、三井氏の後輩の河野幾雄氏が、慶応の山岳部で、夏山に一番最初に連れて行ってくれたのが三井さんだった。三井さんの山登り是一言でいえば「山を楽しむ」姿勢であった。セルカークの山旅とともに、性格そのものの、のどかな山旅を楽しまれた。甲府にかえてからは、地元のために一生懸命つくられたようだった。ことにこの碑をたてるために、佐藤久一朗先輩に



たので、レリーフを刻み、渡辺広幸君が大谷石を商売にしていたので、地下一千尺から切り出し、ここまで運んできた。三井さんの在りし日、三井さんのお手紙、皆様が木暮さんに抱いたと同じような気持ちになる、と話された。

このあと、名児耶さん、近藤さん、横山さんなどが記念感話をされ、三井前支部長の遺影を中心にして記念撮影を行い、碑前祭を終った。五月の陽光は白樺の梢をゆるがし、快い限りであった。

六時、昔のまま丸屋根の有井館でランプに灯を入れて懇親会が始まった。山菜料理の数々、ゆずり原のナガイモ、芦川のワサビ、コンニャク。馬サシ、タラノメ、ワラビ、コゴメ、ヤマウド、ミョウガ、ワソノミ、コノメ、これらは支部の方々が当日付近の山で採ってこられたものを、手早く料理したものである。

宴なかばで、窪川五郎氏が、本場アルプスの名花を鉢に咲かせたものを持参し披露された。

今回の記念品、メキシコの手造りのガラスコップが各員の手に渡す頃、金山の夜はふけて、ヨタカがなきた。最後は、有井館心づくしの手打ちそばを腹一杯賞味して会を閉じた。

翌二十日、朝食後、思い思いの山を目指して散会した。この日も天気は晴朗、ウグイスの声におくられて、再会を約して金山平をあとにした。

山梨支部には器量人が多く、名コックの平井、山岸、小野むつ子さん。車で黙々と参加者の輸送を担当した山本稔君、酒のお相手をひきつけた、田村、遠藤君ら、本当に御苦労様でした。

私事ながら、二十日、みずがき山から信州峠、信濃川上を経て帰名の途についた。

第十三回登山技術講習会

指導委員会

恒例の十一月富士の技術講習会が五月に延期されたあと、手馴れた松永担当理事、降旗委員が信濃支部のアンナブルナ遠征隊に急遽参加が決まり、何となく私のところにお鉢が廻ってきた。

指導委員十五人の内、東京在住は六名、山崎、金坂さんは日山協の総会へ、神崎君は大岳の集責任者、結局宮崎君を中心とした若い仲間が全面的におんぶすることになった。

PR不足か、不馴れな私達の運営を見越されてか、参加者は十五名、十二名の講師、助手でマンツーマンに近い講習会となった。

参加者中の異色は七十四歳の中原さん、六十七歳の長沢さんと、結婚式を二週間後に控えた三愛の若いカップルであった。

五月十七日二十時JAC前をレンタカーで出発し、お庭山荘で半泊。例年になく少ない残雪の五月富士に戸惑いながら、近くの白草流しの雪渓上で基礎訓練、小人数のためミッチリしごかれた。

十九日、前夜中に前線も通過したので朝から素晴らしい無風快晴、七時三十分発。

OB組は七太郎尾根、あとは白草流しの雪上を登り、直下で強風に吹き上げられて十二時頃から続々頂上着。全くと元気な中原さん達も無事一三時三〇分着。古畑君の酸漿をタッブリ吸った後下山。参加者全員登頂は珍記録か。

余りの好天に雪上を歩いた全員雪焼がひどく顔が真赤にハレ上る。夜の紅茶会（ビール会）は大いにハッスルした。

二十日は朝から強風、机上講習に切換え、ロープの結び方他の実習を行い、一二時三〇分下山。全員事故もなくまずまず楽しい山行に終始出来た。

参加人数も少なく、不馴れの委員は気も滅入り、一旦は再延期も覚悟した講習会であったが、若い仲間が元気づけられ、協力を申出られて無事実施出来たこと心から感謝している。

参加講師、古畑、西奥亮平、桜井薫、三羽勝、品川俊一（医）、東原進（運転）、助手学生四名、宮崎一（宮下秀樹）

図 書 紹 介

『GEOLOGY
OF NEPAL
HIMALAYA』
の発刊を喜ぶ

つい先日、たまたま東京で、北大山の会の若手、北大テーチス会（若手研究者のヒマラヤ自然史研究会）やそれにつながるヘンな男たちが集まった会に出た。そのとき、この本を渡されたのである。十年間のテーチス会のヒマラヤの地質研究の総括が、このなかにまとめられていると思うと、この三〇〇頁の書物の重さがともに胸にずしりときた。

北大を中心としたネパールヒマラヤの地質調査は一九五五年マナスル偵察隊に加った橋本誠二氏にはじまる。一九六二年北大チャムラン登山隊、翌年の北大ナラカンカール遠征隊には隊員に地質屋がいた。こゝまでは登山が主、調査は副であった。このあとは山は狙わず調査を主とする隊や個人となり、遠征主体は北大テーチス会となった。そして、そのなから、修士や卒業論文が生まれるようになった。

これはまさに、わが国における探検調査の「登山から科学へ」という歩みをそのまま踏んできている。それは若者を惹きつける魅力にもなっていたのであろう。だから、ボス教授がいて、科学研究費があつて、若者をつれていくという調査隊とはまったくちがった。

ものにならざるをえなかった。大学のなかでは、学生や大学院生はなかなか一人前にあつてくれない。ヒマラヤに調査と称して遊びに行くのはけしからんとか、ヒマラヤでは修士論文は合格させられない。日本でもいちどやりなせよなどの声も聞かれた。こういうことはおそろしく、探検調査を志した若い研究者や学生ならば、おおかれすくなれ誰でもが経験したことであらう。

だから、テーチス会も好むと好まざるにかかわらず、いわゆる自主講座風になっていた。本書の標題の見返しの下に、北海道大学テーチス会業績ZOO.とある。テーチス会の地学、生物学、水河学の業績論文のナンバーはすでに二〇〇を越しているはずだ。このZOO.は本書のために空白にしてあったのである。一九六五年、六九年の隊は幸い、酒匂、秋葉のすぐれた二人の隊長を得て、この業績の中心的部分をなしとげた。この二隊はともに、一般の寄付による三〇〇万円ぐらいの費用で、しかも一〇人ちかい隊員をひきつれ、四ヶ月の調査を行っている。だから出費は徹底してきつめられた。現地食はもちろんのこと、民家の軒下泊りの貧乏旅行であった。秋葉が帰国して述懐して言った。「一晩でいいからカトマンズでホテルに泊つみたかったよ」。

調査はいっそう能率的になり、各人の分担地域をきめ、そのなかを網の目のように歩きまわった。本書の各所に挿入されているルート図をみるとそれはあきらかだ。そして、予定のところでは合流し、討論し調整してまた別れる、というぐあいだった。隊員でさえボータイ一人をつけれ、調査地域をわりあてられてほうりだされるありさまであった。

そして、秋葉隊の太田や在田を中心

にしてまとめがはじまったのは、一九七〇年になってからである。古いデータや発表された論文を中心にした討議や新しいデータの総合などで、すでに就職したいのは夕方になると太田の研究會にたまってはいた。しかし、それはまたヒマラヤでの苦労話や失敗談に花が咲くサロンでもあった。

太田たちのすぐれた解析と総合の結果、この本はたんに調査結果をならべただけのものではなく、ヨーロッパアルプス中心の造山論を否定し、ヒマラヤはアルプスとは違ったがちがうのだ、という主張をうちたてるところまでいっている。その専門的な評価はまたべつのところではなされるだろう。とにかく、この本はわが国におけるヒマラヤの地質学研究のなかで、はじめての総合的な業績であると同時に、北大テーチス会という大学院生を中心とした自主研究グループが、アカデミズムの無視と無関心のなかで、おおくの人びとの激励と援助を得てつづけたヒマラヤ研究のひとつの一里塚であることはまちがいない。その発刊を祝うとともにつぎに計画されているというネパールヒマラヤの生物学のそれを期待したい。（木崎甲子郎）

ヒマラヤ チョウと花の旅

堀 勝彦著

一昨年の信州大学山岳会のアンナブルナII峰登山隊の隊員として参加した著者が、登山終了後もネパールに残り、前後八ヶ月間に亘って同地に滞在した間に写した、美しい写真を中心とする豪華な本である。著者はもちろん、信州大在学中、山岳部員であったが、農学部で農業害虫を専攻し、かつ写真の技術を磨いた特技の持主で、昆虫、写真の双方で第一人者である田淵行男氏に師事してさらに腕に磨きをかけ、登山隊には昆虫班及び報道担当者として

参加した。そして素晴らしい写真とともに信濃毎日新聞紙上に記事を送って、連載されたものを、一冊の本にまとめたものである。

カラー写真は約百枚、モノクロ写真が約八十枚、この本には収められており、どの写真をとってみても、切抜いて額に入れて飾りたいような、すばらしい写真ばかりである。特に著者が情熱を傾けて、この本の表題とした「チョウと花」の写真は秀逸であり、数も多い。チョウは、ボカラのような低地にいる亜熱帯種から、雪線近くにいたる高山蝶にいたるまで、ネパールを代表する種類の写真が集められ、カラー写真だけでも、生態写真、標本写真、真だけでも十数枚、すばらしい発色で目を楽しませる。生態写真の中には、カメラで捉えることが非常に難しい敏捷なチョウも含まれ、著者の苦労がしのばれる。また標本写真の中には、日本では初めて紹介される珍種も含まれている。そして種名も正確に調べてあり、図鑑の役目も果していい。植物もカラー写真だけでも二十枚近く、数多くの可憐な高山植物と接することができる。チョウと花以外の写真は風景写真や現地人のポートレート、風俗写真であるが、どれもネパールの様子がにじみ出ており、既にネパールを訪れた人達には懐しく、これから行く人には、期待に胸を躍らせるような魅力が溢れている。

解説は必ずしもアカデミックではないが、チョウや花に造詣のない人にも判りやすく、やさしく書かれており、自然を観察しながらの紀行文としての楽しい文である。随所に著者の博識と鋭い観察眼をみつけることができるし、またユーモラスな旅の一端をうかがうことができる。

それにも増して嬉しいことは、著者が自然の愛好者であつて、虫に語りかけ、植物と話し合い、動植物を友として旅を続けていく、心の豊かさが、あちこちの表現から汲みとれることである。若干高価な本であるが、チョウや花の愛好者はもとより、山の好きな人、ネパールの好きな人は、きっと本の価格以上のものを得られると思う。

昭和四十七年八月
信濃毎日新聞社発行
A4判 一八三頁 ケース入
頒価 三千元 （春田俊郎）

図書委員会報告

近藤 信行

六月十三日、本年度の第一回図書委員会をひらき、各委員の役割分担および左記の行事予定をききましたので御報告いたします。

○山岳図書交換即売会

○この一本展

○鳥水・理太郎・金次郎三氏

○生誕百年記念展

○山岳図書を読む夕

○山岳史懇談会

○山岳・理太郎・金次郎展目録

○鳥水・理太郎・金次郎展目録

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

○山岳 覆刻版

第六回図書交換即売会

恒例の図書交換会は、十月十三日(土)にきまりました。毎回、多くの会員諸氏から御協力をいただき、まいりましたが、本年も多数御出品くださいますよう、よろしくお願いいたします。出品しめきりは九月二十九日(土)といたします。即売会への参加は会員に限らせていただきます。(図書委員会)

会務報告

会員異動

終身会員(48年6月)

三三〇四 岸田 権一

代表者変更

三二五六 日本興業銀行山岳ハイキング部代表 柴田四郎

三二二三 第一生命保険相互会社山岳部代表 上原久男

退会会員(48年6月)

五〇二八 武田 和喜

物故会員

三二五四 岡村 精一 昭和四八・六・二逝去

会員名簿1971訂正

二二頁上二四行四八二四 電話(〇四二九)四二二四〇七

ルーム日誌(48年6月)

- 4日(月) 集会委員会
- 5日(火) 稲門山岳会
- 6日(水) 常務理事懇談会
- 7日(木) 自然保護委員会
- 8日(金) 理事会
- 11日(月) 集会委員会
- 12日(火) 山研委員会
- 13日(水) 図書委員会
- 15日(金) 青年学生懇談会

20日(水) 第二九六回小集会「岩登り机上講習会」講師 小西政

継氏

21日(木) 学生部女子部例会

22日(金) 中大山岳部・北大山の会

25日(月) 山岳編集委員会

26日(火) 常務理事会

27日(水) 稲門山岳会

婦人懇談会

28日(木) 鳥水・理太郎一〇〇年祭準備委員会

山日記編集委員会

29日(金) 新旧役員懇談会

30日(土) 北大山の会

六月中 来室者 五三一名

図書室便り(昭和48・6)

新刊図書受入報告

福島郷土文化研究会寄贈

(1) 小林金次郎著『火の山散歩』昭和47

松本登高会寄贈

(1) 松本登高会編『アビ遠征報告書』昭和48

信濃路寄贈

(1) 大町山岳博物館編『北アルプス博物誌』II 植物・地学 昭和48

(2) 大町山岳博物館編『北アルプス博物誌』III 動物・自然保護 昭和48

白水社寄贈

(1) 深田久弥著『ヒマラヤの高峰 I』昭和48

田村俊介氏寄贈

(1) セミヨノフ著・田村俊介訳『はるかなる天山』昭和47

伊田弘美氏寄贈

(1) 伊田弘美著『カラー大山の花たち』昭和48

日本山岳会

日本山岳会編『山岳』第2年第2号

『(複製版)』

定期刊行物受入報告

〔部報・会報〕

(1) いこいの山岳会『月報』No. 142 (48-6)

(2) 日本ヒンズー・クシユ会議『H・K・T ニュース』No. 10 (48-6)

(3) 北海道自然保護協会『会報』No. 13 (48-6)

(4) 兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 73 (48-6)

(5) 日本地図資料協会『古地図研究』No. 40 (48-6)

(6) 国立公園協会『国立公園』No. 282 (48-6)

(7) 京都山岳会『京都山岳』No. 578 (48-6)

(8) 奥多摩山岳会『O・M・C・レポート』No. 283 (48-6)

(9) 長野県山岳協会『山岳協会ニュース』No. 23 (48-6)

(10) 日本自然保護協会『自然保護』No. 131 (48-6)

(11) 低い山を歩く会『低山』No. 95 (48-6)

(12) 神奈川県山岳連盟『ときわ木』No. 35 (48-6)

(13) 日本山岳協会『登山月報』No. 50 (48-6)

(14) 横浜山岳会『山』No. 488 (48-2), No. 489 (48-3), No. 490 (48-4), No. 491 (48-5), No. 492 (48-6)

(15) 日本登山協会『山と雪』No. 181 (48-6)

〔雑誌〕

(1) 『アルプ』No. 184 (48-6)

(2) 『岳人』No. 313 (48-6)

(3) 『岳人』別冊73の夏山

(4) 『山と溪谷』No. 418 (48-7)

(5) 『創作』No. 118 (48-5)

〔その他〕

(1) 日本観光文化研究所『戦後学生探検活動史』

(2) 電気通信大学山の会『第1次ヒマラヤ遠征隊報告書』72

(3) 同人ユングフラウ『日本女性マナスル登山隊計画書』74

(4) 東京工業大学山岳部『ヒマラヤ遠征隊報告書』70

(5) 十勝山岳連盟『自然保護委員会47年度報告』

(6) 雪標山岳会『ホーキンズ・ピーク』71

71 プタ・ヒウンチュリ 72 20周年記念山行の記録

(7) 早池峰の自然を守る会『早池峰の自然を守る会』No. 5

〔新着海外雑誌〕

1. "Alpinismus" 73-4, 73-5.

2. "Appalacha Bulletin" Vol. 39, No. 5, April '73.

3. "La Montagne et Alpinisme" No. 91, 1/1973.

4. "Österreichischer Alpenverein" Jah. 28 Heft 3/4 Marz/April '73.

5. "Österreichische Alpenzeitung" 91. Jah. Folge 1388 Marz/April '73.

6. "U.I.A.A." No. 53 Fevrier '73.

〔洋書受入報告〕

1. Himalayan Committee Hokkaido University "Geology of the Nepal Himalayas" 1973.

~~~~~

第十六回有志閑談会

恒例の有志閑談会は、六月二十三日の午後四時半から六義園心泉亭でひらかれた。からりと晴れあがったこの日は、四十八名の参加をえて午後八時まで歓談が続き、盛会であった。

横有恒名誉会員のあいさつのあと、中屋健式副会長から新ルームへの移転、上高地山岳研究所の進行状況が報告され、また田中薫名誉会員から近況が語られた。

遠来の客、坂本直行氏は「北海道で山の集まりがあると、わたしなんかは老いばれの方であまりいい気分がしないのですが、ここへまゐりますとわたしより上の方がいらつちやうて、たいへん気楽です。今夏はカナダの山に出かけ、絵をかいてまた東京に出稼ぎにきます」とユーモラスに元気なところをみせられ、さらにこの日のために明治四十二年以降の有志閑談会の歴史を調べてきたという藤島敏男名誉会員は、こんなせまいところに、五十人も目ざしおしに並んでは、閑談会というものではない、騒談会だ」とビリッと一席、若い世話人をときまぎさせた。

次回の世話人は、松丸秀夫、宮下秀樹、浜野吉生三氏に決定した。どうぞよろしく。(近藤信行)

〔出席者〕山崎金次郎 松本熊次郎 神谷恭 横有恒 村尾金三 三田幸夫 山本朋三郎 山村正光 今井雄一 関根吉郎 岩永信雄 名見耶達男 野口末延 今村正二 鶴岡元之助 望月達夫 中屋健式 松丸秀夫 齋藤桂 金坂一郎 伊倉剛三 山崎安治 島田異折 井健一 藤井連平 藤島敏男 朝井一男 古沢肇 今井嘉道 佐藤久一郎 村山雅美 網蔵志朗 織内信彦 田口二郎 川森左智子 宮下秀樹 吉田久兵衛 林和夫 坂本直行 渡辺弥生 小原勝郎 小原晴子 田中薫 渡辺公平 春田俊郎(世話人) 須田紀子 坂下心一 近藤信行 (順不同)



## 除籍者氏名

左記の会員は会費滞納のため、定款第十二条第一項の規定により、本会台帳より除籍されました。復活御希望の方がありましたら、その手続きをとられますようお願いいたします。

昭和四五年度以降未納

二〇一六 菅田 太郎  
四〇七〇 遅塚 世六  
四一五二 佐藤 昭雄  
四五四四 武内 良祐  
四五七六 千住 保典  
四六〇五 佐藤 一英  
四七九四 沢 英武  
四九〇二 富岡 卓也  
五一九八 渡辺 暉邦  
五三四八 渡辺 照人  
五四三一 山岸 猛男  
五四九一 宮本 千晴  
五五一四 鎌内 章  
五六九二 深沢 忠孝  
五八二七 吉田 実  
五八四七 稲田 房子  
五九一二 中尾 健児  
五九二三 嶋田晃一郎  
六〇六一 名取 春実  
六一三〇 成沢 清  
六一八三 横田 正利  
六一八五 稲垣 公平  
六二二二 菊地 忠男  
六二三八 小山 良隆  
六二六三 大宮司 康治  
六二六九 島村 洋一  
六二九三 山田 裕紀  
六四〇四 林 一夫  
六四三二 殿岡 勝紀  
六四四七 富田 英夫  
六四八二 藤居ふみよ  
六五二八 熊倉 俊二  
六五七九 小林 紘司  
六六〇四 藤沼 一徳

|      |                    |     |      |    |    |    |
|------|--------------------|-----|------|----|----|----|
| 六六八一 | 都築                 | 威男  | 六六八一 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六六八五 | 青柳                 | 一雄  | 六六八五 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六七一一 | 坂梨                 | 信介  | 六七一一 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六七二一 | 原                  | 勇   | 六七二一 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六七八四 | 岩瀬                 | 時郎  | 六七八四 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六七九六 | 吉岡                 | 義彦  | 六七九六 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六八〇四 | 出田                 | 興生  | 六八〇四 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六八二七 | 栗原                 | 敏起  | 六八二七 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六八三四 | 岩山                 | 喜一  | 六八三四 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六八八四 | 相田                 | 克己  | 六八八四 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六八九〇 | 伊藤                 | 礼造  | 六八九〇 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六八九一 | 板垣                 | 孝統司 | 六八九一 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六八九二 | Lawrence S. Kaplan |     | 六八九二 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 五六七四 | 関                  | 哲   | 五六七四 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 五九七二 | 松本                 | 登   | 五九七二 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 五九九五 | 井上                 | 一捷  | 五九九五 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六一四五 | 石川                 | 隆洋  | 六一四五 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 四七〇〇 | 千葉                 | 桃八  | 四七〇〇 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六八六三 | 鈴木                 | 長光  | 六八六三 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 四二三一 | 田村                 | 昭平  | 四二三一 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 四六八四 | 宝井                 | 勇   | 四六八四 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 五二一五 | 伊藤                 | 辰也  | 五二一五 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 一四一九 | 尾崎                 | 喜八  | 一四一九 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 五二二九 | 小山                 | 正俊  | 五二二九 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 五二六八 | 岩間                 | 利光  | 五二六八 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 五五七三 | 村田                 | 昭美  | 五五七三 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 五六八六 | 清水                 | 芳美  | 五六八六 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 五七五三 | 西原                 | 長明  | 五七五三 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六六九三 | 百瀬                 | 文幸  | 六六九三 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六六九四 | 内川                 | 暁   | 六六九四 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 五四九七 | 神山                 | 辰雄  | 五四九七 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六六五〇 | 遠藤                 | 和夫  | 六六五〇 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六五二四 | 福井                 | 正義  | 六五二四 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六五三九 | 太田                 | 欽也  | 六五三九 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 四九五三 | 藤森                 | 元夫  | 四九五三 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 五三七四 | 鈴木                 | 広司  | 五三七四 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六二一五 | 石本                 | 昌勝  | 六二一五 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六三一  | 深谷                 | 義郎  | 六三一  | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六五〇二 | 岡田                 | 孝   | 六五〇二 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六七二六 | 吉原                 | 正勝  | 六七二六 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六七四九 | 酒井                 | 祖美  | 六七四九 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 六九一九 | 西原                 | 祥浩  | 六九一九 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |
| 五六一三 | 山本                 | 照彦  | 五六一三 | 山本 | 照彦 | 岐阜 |

|      |                  |    |
|------|------------------|----|
| 五二〇五 | 田中美和子            | 富山 |
| 六七四七 | 高橋良太郎            | 石川 |
| 六七八六 | 金沢大学医学部<br>十全山岳会 | 石川 |
| 一〇四五 | 松井 啓祐            | 関西 |
| 四四二〇 | 小川 真司            | 関西 |
| 四六四三 | 岩坪 五郎            | 関西 |
| 四八三四 | 穴戸 元             | 関西 |
| 五一二九 | 伴 明              | 関西 |
| 五一八八 | 前田 清             | 関西 |
| 五九一七 | 清水 一男            | 関西 |
| 五九二五 | 富野 捷治            | 関西 |
| 六七〇二 | 辰野 勇             | 関西 |
| 六七九三 | 萩原 孝             | 関西 |
| 六八四〇 | 新藤 武             | 関西 |
| 六六〇九 | 広行 忠良            | 山陰 |
| 六六四〇 | 園 重祥             | 福岡 |
| 一八二三 | 江口 隆雄            | 熊本 |
| 四四三九 | 菅 隆雄             | 熊本 |
| 二三四〇 | 大山山岳会            | 熊本 |
| 三七〇六 | 坂口 広次            | 熊本 |
| 三八〇六 | 武田 武             | 熊本 |
| 五〇三三 | 三島 定男            | 熊本 |
| 五〇七五 | 竹内 博美            | 熊本 |
| 五五〇八 | 中村 健             | 熊本 |
| 五八八八 | 宮崎 和夫            | 熊本 |
| 六三七七 | 伊藤 牧夫            | 熊本 |
| 六五四二 | 西 安信             | 熊本 |
| 六八五二 | 長谷川 勝            | 熊本 |
| 六八八七 | 井上 治郎            | 熊本 |
| 四一六八 | 黒田 耕治            | 海外 |

訂正 会報三三七号会務報告(一)  
 ○頁 除籍者氏名欄中 五八四二だ  
 けかんばん山の会 六四三〇 白木正俊  
 とあるを取消します。

上高地山岳研究所  
 募金状況 (48・7・25現在)  
 ※応募件数 五〇七件  
 ※金 額 四、二七四、九〇三円  
 ※目標額対比 八五・四%

東京都港区赤坂一丁目三番六号  
印刷所 株式会社 技報堂

第18日目 カルカッタ✈東京



# 茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

## ブータン感傷旅行

小方全弘著

〈菊判280頁〉定価980円

## 森林・草原・氷河

加藤泰安著

〈A 5判482頁〉定価1,500円

## すこし昔の話

初見一雄著

〈四六判400頁〉定価1,200円

## 遠い山・近い山

望月達夫著

〈B 6判334頁〉定価960円

## 山の古典と共に

大島堅造著

〈四六判280頁〉定価1,500円

## 雪山・藪山

川崎精雄著

〈A 5変型判340頁〉定価1,200円

## 雪原の足あと

坂本直行著

〈B 5判206頁〉定価2,800円

## 遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年

日本山岳会東海支部

〈B 5判430頁・カラー64頁〉定価4,800円

## 山日記1973年版

日本山岳会編

〈A 6判344頁〉定価850円

## 山 岳

日本山岳会編

〈A 5判〉

66年 2,300円

65年 2,000円

64年 2,000円

63年 2,200円

62年 2,000円

総索引 1,000円

## 国立公園カレンダー

国立公園協会編

〈A 5判リング綴り〉定価960円

## 屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

〈B 6判202頁〉定価480円

## 山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編

〈A 6判126頁〉1集240円・2集280円

## いろいろばた

南会津山の会

〈B 24判リ判320頁〉定価1,900円

シブトンの自叙伝

## 未踏の山河

大賀二郎・倉知敬記

〈A 5判440頁〉定価1,900円

## 日高山脈

北大山の会編

〈菊判362頁〉定価2,200円

## 山に忘れたパイプ

藤島敏男著

〈菊判584頁〉定価2,500円

## 日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

〈A 変型208頁〉定価3,600円

## 登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

〈A 5判350頁〉定価900円

## 登山・スキー用具専門店

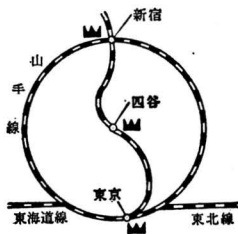
# 山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101  
TEL. 06(362)5736

●買いやすい  
山の店

●北へ来たら  
山の店

●フレッシュな  
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地  
TEL (351) 7432-1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五  
TEL (271) 1560-8575

新宿店 新宿ステーションビル四階  
サービスショップ  
TEL (352) 65664

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

## 山とスキーの専門店

# 片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべく なんにも  
持たない方がいい  
けれど、どうしても  
要するものがある。  
なにしろ人間ですから  
としごき山ですから  
どしどし山ですから

かたろぐ・シンテイ  
でんや 281-8456  
中央区・八重洲4-11

秀山荘

## 登山とスキー具

# イワタ

東京都中央区日本橋通2-1  
PHON: 271-7686・1718

## 登山用具の専門店

# 好日山荘

東京都・中央区・銀座 2-4-5 (561) 3600・(567) 9031  
東京都・中央区・銀座 2-4-4 (561) 0966 スキー店  
大阪店・北区・豊国路 1-1 目47 3641 0933 (代)  
福岡店・区 1-4 28) 34440

